2024 年 12 月 23 日

全国の教会・伝道所の女性会の皆さま
教会に集う皆さま

日本バプテスト女性連合
6・23「沖縄（命どぅ宝）の日」推進委員会

「祈り便」第 66 信（12 月～3 月）のご案内

■**うりずん**　一緒に歩いている友に尋ねる。「沖縄で好きな言葉は？」「うりずん」「なんで？」「新しいことが芽生える。春先、雨が降り、大地が潤わされ植物が芽吹く。新しいことが始まる、希望の言葉、沖縄ではいつの時代も希望を見上げて…」。

■**唯さん**　6 月 16 日県議選があり、沖縄 3 区より儀保唯さんが当選。辺野古の座り込みに 23 年前、お父さんと来ていた。お父さんは農業をしながら、東村高江のヘリパット建設に反対し、地域に仕えている方だった。

唯さんに「どんな沖縄にしていきたいですか」と聞くと「沖縄に住む人が自分たちのことは自分たちで決められるんだ、と実感できる沖縄にしたいと思っています」と。唯さんを取り囲む人びとの愛情や環境が彼女を成長させたのだと思う。県民の叫び、呻きが凝縮した県民大会が何度開かれたことだろう。それでも叫びは届かず、辺野古の新しい基地の建設反対の座り込みは 27 年目を迎える。1995 年の米兵による少女暴行事件から基地撤去の叫びへ。人びとの叫びに呼応して普天間基地返還、その代わり、新しい辺野古基地建設計画が浮上。沖縄戦を生き延びた方がたの「新しい基地はいらない。もう戦争は嫌だ」から座り込みが始まった。

■**憲法の上に安保**　住民の訴える裁判に参加するうち、「なぜ、住民の正当な訴えがいつも却下されるのか」と疑問が湧いてくる。思い切って時間の合間をぬって弁護士さんに聞いてみた。「なぜ、いつも住民の訴えが聞かれないのですか」。弁護士さん曰く、「憲法の上に安保があるから」。本来は安保の上に憲法があるはずなのに。

■**憲法 9 条と安保**　戦後、沖縄県だけが切り離され、米軍の統治に差し出され、筆舌に表しきれない体験を強いられた。1972 年、人権を大切にする憲法 9 条の元に入ることを願って県民が島ぐるみで「日本」復帰を果たしてから 52 年。当時の新聞が「この復帰は『差別と疎外』をもたらす」と予見した通りの沖縄の今。

■**今こそいっしょに平和を**　日本の全人口の約１％の沖縄県に在日米軍専用基地の 70％があるという過重負担。残り 99％の人は過少負担で済む。米軍基地のフェンスから自由に民間地域に出てきたり、居住する一部の米兵による事件は絶えず起こる。爆音、基地からの有害物質が飲み水を汚染している。そんな命の危険を感じながら、生活している。今は、再び新たな戦場にされようとしている恐怖も加わった。しかし、それらをはるかに超える新たな時代に向けてのエネルギー。

うりずん、芽吹きをいっぱいいただく沖縄。

諸教会・伝道所の皆さま、2024 年度も「沖縄 6・23 学習ツアー」「『祈り便』」の働きを覚えてお祈りくださり感謝します。平和を求めて共に祈りを重ねていきたいです。